

弥生時代の動物質食料

西本豊弘

はじめに

- 1 縄文時代との相違
- 2 弥生人の食肉交換

3 生業と動物質食料の特徴

おわりに

論文要旨

弥生時代の生活は、農耕をどの程度受け入れるかによって、その地域毎に大きな差異があったと思われる。ここでは、稲作農耕が積極的に受け入れられたと推定される北九州から濃尾平野までの西日本の弥生遺跡を取り上げ、弥生時代における動物質食料について検討する。

西日本の弥生遺跡では、当初の段階から稲作農耕が行われたが、稲作だけではなくブタやイヌが新たに導入され、それを食べる習慣ももたらされた。それに伴って野生動物に対する狩猟活動が減少する。シカやイノシシも減少するが、タヌキやキツネ・ムササビなどの毛皮を目的とした中・小型獣の減少が顕著である。また、人口増加による食料不足と、それを解消するための食肉交換が行われたと推測された。

このように動物質食料も変化するが、ブタの下顎骨を儀礼的に扱うことや、シカ・イノシシ（ブタ？）の肩甲骨を用いた「占い」も行われた。西日本の弥生社会は、大陸からの渡来人によって大陸の農耕文化の全体系が導入されて成立したものであり、これまでの縄文社会とは世界観・価値観がまったく異なった社会であった。この価値観の相違を十分に認識した上で、西日本の弥生社会とそれ以外の地域の動物利用の相違を考えて行かねばならない。